岡山大学教育学部研究集録　第115号　(2000)　1－11

藤原教長の「貧道集」と「伊勢物語」

稲田　利徳

藤原教長の家集「貧道集」には、「伊勢物語」を摂取した和歌が頻出する。この論考では、その享受の状況が、教長が保元の乱にあって出家、常陸に配流される以前と以降とでは、著しく相違することを具体的に和歌を吟味しながら論証した。

Keywords：享受・教長・伊勢物語・貧道集・本歌取・出家

一

「伊勢物語」が「古今集」や「源氏物語」とともに、その成立以降、日本文学に種々な次元から甚大な影響を及ぼしてきた歌物語であることは、ここで贅言を要しない。

それだけに「伊勢物語」（以下、「勢語」と略称することもある）の注釈書・研究書も汗牛充棟、享受史の方面でも研究の堆積は厚いものがある。すでに著書として纏められているものには、伊藤颯夫著『伊勢物語の享受に関する研究』（全三巻）のように、「平安朝編1・2・3」とサブタイトルを付し、主として平安朝の物語・日記・歌集など、あらゆる文学作品にわたり、「勢語」の享受の痕跡を丹念に辿った労作も存する。また、ごく近年刊行された、島内景二氏『伊勢物語の水脈と波紋』は、「勢語」を水源とする「水脈」は、文学作品だけでなく、あらゆる芸術ジャンルにも浸透しながら、途切れることなく現代まで脈々と流れているとの見通しのもと、中世・近世から近代の文学作品にとどまらず、美術や音楽の方面までの「水脈」を辿ったユニークな著書である。

このほか個々の作家や作品に焦点を絞って「勢語」の享受の様態を究明した論考は、枚挙に遑がないほどあるが、それらを通覧して痛感することは、「勢語」の摂取は個々の作家・作品によって、各々に様相を異にすることである。

現存の「伊勢物語」という作品は、一応、「昔男」の初冠の章段から始発し、最終章段は臨終の詠歌で諦め括られ、男のアバンチュールとしての一代記の構造を有する。

確かに「勢語」は、男の恋愛歌を中核に据えた歌物語ではあるが、その恋愛遍歴、あるいは君主との和睦などを通し、人生の喜怒哀楽を陰翳深く描いている。しかもその描写手法は、決して冗舌に流れず寡黙であり、それゆえに含蓄に富む。「勢語」が現代まで読み継がれた魅力の一端もそこに求められよう。

従って、享受者側も「勢語」の、そういった多様な相貌のどの部分に照明をあてて享受するのか、自身の人生と絡めながら、種々な異相があってしかるべきであろう。

樋口芳麻呂氏に「藤原隆信の恋」[1]という卓論がある。これは色好みであった隆信の自撰家集の恋部に着目、彼の恋愛行為や贈答歌が「勢語」を下敷にしたものであることを鮮明に論及したものである。いわば隆信は自身を「勢語」の主人公に擬し、その姿と重ねながら恋愛行為を演出していたと思われるほどで

岡山大学教育学部国語教育講座　七〇〇―八五三〇　岡山市津島中三―一―一
Toshinori INADA
Department of Japanese Language Education, Faculty of Education; Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

ある。ここにも隆信という歌人の「勢語」享受の独特な一面が鮮やかである。

また、私は先に「木下勝俊の『九州の道の記』と『伊勢物語』[2]の論考にお いて、「九州の道の記」における「勢語」の享受の様相を辿ったことがある。

この紀行文は、当時二十四歳だった青年武将であった勝俊が、文禄の役に従軍するため、京都から肥前名護屋に到着するまでの道の記である。この作品は短文ではあるが、そこに十数箇所にわたり、「勢語」を摂取した表現がある。しかも、それが作品の主調音と緊密に結び合っている。即ち、摂取した「勢語」の章段は、男が京洛を離れて東国へ下る章段のほか、恋人との別離を扱った第二段や第四段、夫婦の別離の第十六段など、別れを主情とする章段を意図的に選択し、故郷に肉親を残したままに戦闘に参加せねばならない、自身の西国下向と重層しているのである。

ここには色恋沙汰とは無縁な次元、即ち、親しい人との別離の悲哀の場面に焦点を絞った「勢語」享受がなされていて特異である。

ここで対象とする藤原教長は、崇徳院の近臣として、崇徳院歌壇で活躍した歌人である。後に詳述するが、彼は保元の乱の際、崇徳上皇の挙兵に随従して敗走、広隆寺辺で出家したが捕らえられ、常陸に配流された。その後、平治の乱後、赦免・召還されたが、東山・北山などで隠遁的な生活を送ったり、高野山に入った。その間、京洛の歌人仲間とも和歌を介しての交誼を重ねてもいる。このように、平安末期の不穏な時代に生を営んだ教長には、「貧道集」という家集が残されている。「貧道集」にも「勢語」の享受は顕著であるが、保元の乱を挟んでの前と後には、摂取の様相に著しい変化がみてとれるように思う。

ここでは、そういった問題意識を念頭に、教長の人生遍歴と「貧道集」から窺知できる「勢語」の享受の様相の一端を究明してみたい。

二

藤原教長の伝記に関しては、彼が保元の乱に関与したこともあり、夙く、多賀宗隼氏「参議藤原教長伝」[3]や岩崎小弥太氏「藤原教長」[4]など、日本史の研究者の側からの論考があった。特に後者は、記録類の史実調査にとどまらず、「貧道集」をはじめ、教長と交誼のあった周辺歌人の家集の関連記事、古今集註の奥書、能書に関する事跡などを限なく取りあげた詳細な伝記記述である。その後、教長の歌人的側面を中心に纏めた高崎由理氏「藤原教長年譜」[5]も公表され、また、井上宗雄氏『平安後期歌人伝の研究 増補版』、松野陽一氏『藤原俊成の研究』、『鳥帯 千載集時代和歌の研究』などの著書にも、教長の歌壇活動に随所に触れるところがあり、その生涯もかなり詳細に辿れるまでになっている。

教長の「貧道集」における「勢語」の享受を跡付けるためには、彼の波瀾に富んだ生涯と相即する面があるので、先学の研究成果も参照しながら、その伝記を略述しておく。

教長の父は大納言藤原忠教、母は大納言源俊明の女。「公卿補任」の年齢記載から逆算すると、天仁二年（一一〇九）の誕生となる。大治元年（一一二六）、十八歳のとき蔵人に補せられ、本格的な崇徳天皇との関連が始発する。以後、蔵人頭、参議に昇り、ついで永治元年（一一四一）十二月、崇徳天皇の譲位後、新院別当となり、仙洞御所に伺候、「年比の新院の近習者」（愚管抄）として、為政者としても歌人としても活躍する。

例えば、天養元年（一一四四）六月には、「詞花集」撰進に際し、撰者顕輔に院宣を奉る院司を勤めたりしているし、崇徳院歌壇では現在確認される歌会の半数以上に出詠、三種の百首歌にも、すべて出詠するなど歌人としての活動も著しいものがあった。

教長は久寿三年（一一五六）正月、参議と阿波守の両官を辞し、左京大夫に遷ったが、同年（四月二十七日改元、保元元年）七月二日に鳥羽院崩御があった。その後七月九日、崇徳院は突如、鳥羽田中殿を出所せんとし、教長はその不穏当を諫言したが、結局院に随行して白河御所に入り、七月十一日保元の乱の勃発をみた。

教長は元来、「新院の近習者」であっただけでなく、悪左府頼長とも昵懇な間柄であったので、保元の乱のときには、好むと否とにかかわらず、重要な役割を荷わざるをえなかった。「兵範記」には「于時上皇左府合額議定、左京大夫教長卿同候御前」[6]（保元元年七月十日の条）とも記している。

崇徳院側の敗戦の後、彼は敗走して太秦の広隆寺まで落ちのび、そこで出家、法名を観蓮と号した。けれども七月十四日に捕えられ、八月三日に常陸国に配流された。家集には配流地に至るまでの羈旅歌やその地での詠歌も掲載されている。

かくてひたちの国までによそかあまりにまかりいたりぬ、いたらんずるところは、したのうきしまとなんまうす、うみのほとりにふねにのりける時よめる

ひをへてもすぎしみやこのつづきぞとおもふきしべをけふぞはなるる

（貧道集・八二七）[7]

これによると、四十余日もかかって常陸国へ辿り着いたこと、謫居地は霞ヶ浦の湖上に浮かぶ「したのうきしま」（信太の浮島）であったことがわかる。

その後、この地で足かけ六年にわたる配流生活を送っていたが、応保二年（一一六二）三月七日に赦免、召還された。時に五十四歳になっていた。

保元の乱の勃発、常陸の国での六年の長きにわたる辛苦の謫居生活は、教長の人生観に種々な陰翳をもたらし、その和歌の詠風などにも変化をもたらしたであろうことは想像に難くない。

召還以降の教長は、山寺に籠居したり、東山や北山に庵住、高野山にも入山して隠逸的な生活を送っているさまが、家集の詞書からも窺える。その間、覚性法親王を中心とした仁和寺歌壇、清輔らの六条家、俊恵の歌林苑歌会、賀茂氏の歌人仲間とも交わって幅広く歌壇活動を展開し、自身も承安二年（一一七二）には東山歌合などを主催している。その間には、書道口伝「才葉抄」を著し、「古今和歌集註」[8]を記述するとともに、晩年には家集「貧道集」を自撰したと推測される。

教長の死に関しては「寂蓮法師集」に、頼輔との次のような贈答歌がみえる。

高野にしばしこもりたりける比、宰相入道教長やまひにわづらひていまはと成りにければ、頼輔卿とぶらはむとてまかりけるほどに、身まかりてのち彼山にのぼりたるよしをききてつかはしける

たづねきていかに哀とながむらん跡なき山の嶺のしら雲

返し

尋ねきてむなしき空をながめても雲となりにし人をしぞ思ふ

（三四〇～三四一）

この贈答歌は「頼輔集」にも「前宰相教長入道、かうやの御山にこもりゐて、やまひのよしききてまかりたるに、昨日みまかりにけるのちにて、むなしくなげき侍るほどに、中つかさの少輔さだなが入道ききつけて」（一〇〇～一〇一）という詞書のもとで収められている。その死没年時に関し多賀宗隼氏は、教長が治承二年（一一七八）三月十五日の「賀茂別雷社歌合」に出詠していること、「山槐記」の治承四年十月十五日の条に「故教長入道」とあることより、治承二年から四年の間と推定している。[9]が、さらに現在では諸々の事情も考慮し、治承四年、七十二歳ではないかとするのが有力である。

さて、ここで家集「貧道集」に触れておく。

家集名は、丹鶴叢書や続群書類従本の刊本では「前参議教長卿集」とあるが、これは後人による呼称で、天理図書館本以下の写本類にみえる「貧道集」が本来のものとみてよい。

「貧道（ひんどう）」とは、出家者として仏道修行が貧しい意で、僧侶が自身を卑下する語であり、名称自体、この家集が自撰であることを示唆している。現存する諸本数本は同一系統で、古写本がなく、いずれも江戸末期の写本であり、残念ながら丹鶴本・続類従本より優位に立つ伝本を見出せないという。

「貧道集」は、長歌二首、混本歌・旋頭歌各一首を含めて、総歌数九七九首、それを四季・恋・雑に部立編成する。成立年時は、治承二年（一一七八）三月の「別雷社歌合」の詠歌が入集するので、それ以降間もなく成立、教長最晩年の自撰と推定されている。

ただし、松野陽一氏は、崇徳院（贈諡号治承元年七月二十九日）を「讃岐院」と表記するので、骨格になった草稿は安元末年頃までになっており、重家集・長秋詠藻・頼政集などと同様、仁和寺の守覚法親王の依頼によって成立した可能性があるとする。[10]

確かに原型に対し、その後作者自身による追補のあったこと、あるいは他人の詠歌（崇徳院・源俊頼）の混入、重複歌の存在、後人の左注らしきものもあり、自撰したものに、さらに後人の手による増補のあったことも考慮すべきかもしれない。この問題に関する私見は改めて後述する。

三

「伊勢物語」の享受の問題や教長の伝記・家集に関して縷述してきたが、ここで以上の記述を前提に、「貧道集」における「伊勢物語」の享受の様相を探ってゆきたい。

まず、ここでは、教長が保元の乱によって出家を遂げる以前の詠歌を対象とする。

家集収録歌のうち出家以前か以後かの明確でない歌も多いが、出来る限り詞書や内容を吟味して、その事実にも触れながら論及したい。

讃岐院（崇徳院）に関連するものは、出家以前の詠歌とみなしてよい。

讃岐院御時人人に歌めしし次に、

行路初雪

(1) いそぐとていかがはふまんはつゆきのかのこまだらにふれる山ぢを

（貧道集・五五二）

この歌は「行宗集」などとの関連から長承二年（一一三三）内裏十首歌会のものと認定してよい。[11]

(1)の歌は、いうまでもなく「勢語」[12]（第九段）の東下りの著名な場面と詠歌、

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪のふるらん

の「鹿の子まだら」という和歌では珍しい語を摂取している。

「鹿の子まだら」は、鹿の毛のように茶色に白い斑点のあるのをいうが、それを歌題の「初雪」との関連で、地面に点々と薄く降った雪のさまとして取り込んでいる。

一首は、いくら道を急ぐといっても、点々と薄く降った初雪を踏みつけて行くのを避けようと、風雅な精神の意志表示を述べている。

(2) かはのせにおふるたまものうちなびききみにこころはよりにしものを

讃岐院の百首のなかの恋歌

（七〇〇）

この歌は「久安六年百首」（一一五〇）の恋歌二十首の最初の歌であり、[13]下句の「きみにこころはよりにしものを」は、「勢語」（第二十四段）の、三年ぶりに帰郷したところ、妻が別の男と契りを交そうとするのを知った元の男が妻に贈った、

梓弓ま弓槻弓年をへてわがせしがごとうるはしみせよ

の歌に対し、妻が悲痛な情で答えた、

梓弓引けど引かねど昔より心は君によりにし物を

の歌の下句の「心」と「君」の位置を変えて、そのまま借用したとみてよい。ただ、元来、男女の問答歌として完結している「勢語」の「よりにし物を」の表現を、そのまま独立した歌に取り込んだため、(2)の歌ではその余意の事情が不明瞭になっている。

讃岐院御時、御方違の所にて人人おほみきたうびてよもすがらあそばせたまひしに、左京大夫顕輔にたびごとに人人さけをすすめければ、しひてなにとなくいへりしことを歌にとりなし侍

(3) あさなべのここちこそすれちはやぶるつくまのかみのまつりならねど

（九四八）

悲劇の帝王崇徳院から「大御酒」を賜り、方違の所で一晩中酒宴を催したというこの回想場面は、自ずから「勢語」の惟喬親王と右馬頭なる男達との親睦を想起させる。事実、それらの章段には、いずれも、「夜ふくるまで酒飲み物語して、あるじの親王、酔ひて入り給ひなんとす」（第八十二段）、「むかし、水無瀬にかよひ給ひし惟喬の親王……大御酒たまひ、禄たまはむとて、つかはさざりけり」（第八十三段）、「昔つかうまつりし人、俗なる、禅師なる、あまたまゐりあつまりて、む月なれば事だつとて、大御酒たまひけり」（第八十五段）と「大御酒」が出され、惟喬親王と男達との、悲哀を背後に秘めた親密な交情が描かれている。その点、教長は(3)の歌の詞書を記しながら、「勢語」の先の場面を想起していた可能性は十分にあり得るだろう。

しかも、(3)の「あさなべ（浅鍋）」と「筑摩の祭」を取り込んだ歌は、「勢語」（第百二十段）にみえる、

昔、をとこ、女のまだ世経ずとおぼえたるが、人の御もとに忍びてもの聞えて、のちほどへて、

近江なる筑摩の祭とくせなんつれなき人の鍋の数見む

の歌を念頭にしての詠歌なので、「勢語」との関連は、いっそう緊密となろう。

この「近江なる」の歌は、「拾遺集」に、

いつしかもつくまのまつりはやせなんつれなき人のなべのかず見む

（巻十九・雑恋・一二一九）

と若干の異文のもとで入集、「俊頼髄脳」などではこの歌に触れ、筑摩の祭の日には、土地の女は、それまでに逢った男の数だけ鍋をかぶって参詣奉納する風習があったとする。

ただ、(3)の歌と詞書に「勢語」享受の影を感じとっても、詞書の場面状況や歌意は、いまひとつ明瞭ではない。が、この教長の歌は幸い「続詞花集」（第十九）の「物名・聯歌」の部に収められている。「貧道集」と比較すると、和歌の方には異文はないが、詞書に若干異文が存する。そのなかで重要な異文は「しひてなにとなくいへりしことを歌にとりなし侍」が、「ゑひてなにとなくいへりけることを歌にとりなして、すゑをいひける」（九五〇）の箇所で、「続詞花集」の詞書を参照することで、(3)の歌の作歌背景や意味が、少し明瞭になる。

即ち、「続詞花集」によると、(3)の和歌は「聯歌」であって、顕輔が上句を（ただし、「あさなべのここちこそすれ」までか）、下句を教長が付して、一

首に合作したものとわかる。

場面としては、方違の所で、顕輔が人々から幾度も酒を勧められ、すっかり酔っぱらい、「これじゃ、盃どころか、まるで『あさなべ（浅鍋）』（素焼きの底の浅い土鍋）で酒を飲まされたようなものだ」と、ぶつくさ呟いた、それを聞いた教長が、「鍋」の連想で筑摩の祭のことを付して戯れたということであろう。

ただ(3)の歌と場面は、確かに出家以前のことだが、この詞書を付して家集に入集せしめたときの、教長の「勢語」享受の心情には、微妙な変化のあったろうことも念頭におくべきであろう。

因みに、「貧道集」には収められていないが、「新続古今集」に入集の教長の歌、

両方恋といふことを

(4) おもへども身をしわけねばひとかたは心の外の夜がれをぞする

（恋三・一二九〇）

は、「勢語」（第八十五段）の、惟喬親王との交誼の際に男の詠じた、

思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるもわが心なる

とも関連を有し、教長が惟喬親王関連章段を印象にとどめていた傍証ともなろう。

次に「句題百首」の歌を対象とする。

「貧道集」には、漢字四字前後からなる歌題の下に「句題百首」と付記する歌が頻出する。この百首は公重の家集「風情集」にもみえ、その内の一首が「詞花集」に入集している事実、あるいはその他の事情も勘案し、崇徳院が縁者や近臣に召した、ごく内輪の、小規模な歌会での詠歌と考えられている。[14]

この「句題百首」のなかに、次のように二首ほど「勢語」摂取の歌が抽出できる。

嫌賤恋　句題百首

(5) みねたかくこころはゆけどいやしきはくるしかりけりしづのをだまき

（七七〇）

暁餞人　句題百首

(6) あすしらぬわかれををしみかきくらすこころのやみやあけぐれのそら

（九二三）

(5)の歌は、恋情の思いは昂っているけれど、卑しい我が身の恋は苦しいと訴嘆する。「くるしかりけりしづのをだまき」は、「勢語」（第三十二段）の、

いにしへのしづのをだまき繰りかへし昔を今になすよしも哉

の歌をかすめている。が、それ以上にこの歌は、「勢語」（第九十三段）の高い身分の女を恋する苦悩を吐露した、

むかし、をとこ、身はいやしくて、いとになき人を思ひかけたりけり。すこし頼みぬべきさまにやありけん、臥して思ひ、起きて思ひ、思ひわびてよめる。

あふなゝ思ひはすべしなぞへなく高く卑しき苦しかりけり

昔もかかることは、世のことわりにやありけん。

の章段を摂取しての詠歌と思われる。

因みに、覚性法親王の家集「出観集」には、

入道宰相いまだ中将ときこえけるときこのよしをつたへききて、教長卿

(7) さまざまののりをひろむるあまねさはたかきいやしきわかじとぞ思ふ

（八〇六）

という、「貧道集」にみえない法親王との贈答歌が収められているが、これも「勢語」の先の歌を享受したものである。教長歌には、後述のように、この他にも「たかくいやしき」を取り込んだものがあり、印象に残る章段の一つであったようである。

(6)の歌は、「勢語」（第六十九段）の著名な章段である伊勢の斎宮で逢った女の歌に対する男の返歌、

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひ定めよ

の傍線部を摂取している。ただ教長の歌は、恋歌ではなく、暁に旅立つ人との惜別の情を詠じているが、この場面も、同じ斎宮章段の後半部分の、「狩の使ありときゝて、夜ひと夜酒飲みしければ、もはらあひごともえせで、明けばをはりの国へ立ちなむとすれば、男も人知れず血の涙をながせど、え逢はず。……」のシチュエーションと重ねているとみなしてよい。

さらに、次の四首も「勢語」の享受歌と認められる。

海辺蛍

(8) さのみやはあまのいさりびともすべきともへばすだくほたるなりけり

（二八六）

苔庭瞿麦

(9) にはもせのこけのむしろにいろはえてねよげにみゆるとこなつのはな

（二九八）

隔山恋

(10) 白浪のたつたの山とききしかどこひにひかれてこえぬよぞなき

（七三三）

隔河恋

(11) たなばたも逢せはとしにあまの川わたらぬそでぞわれはひちぬる

（七三六）

この四首は、出家以前の詠歌とみる確証はないが、享受の様相からみて、一応、ここに一括してみた。

(8)の歌は、「勢語」（第八十七段）の、

帰りくる道とほくて、うせにし宮内卿もちよしが家の前来るに、日暮れぬ。やどりの方を見やれば、海人の漁火多く見ゆるに、かのあるじのをとこよむ。

晴るゝ夜の星か河辺の蛍かもわが住むかたの海人のたく火か

の場面を念頭にしている。「勢語」が、遠くから見て燃える「海人の漁火」を、星か蛍か漁火かと疑問を発したのに対し、教長歌は、「海人のいさりび」と思ったのは、よく見ると、すだく蛍だったと転じている。

(9)の歌は、青い苔のなかに美麗に咲く撫子の花を詠じ、苔の「筵」と「とこなつ」の「床」の縁で「ねよげにみゆる」撫子だと、女性をも暗示する。この「ねよげにみゆる」は、「勢語」（第四十九段）の、

むかし、をとこ、妹のいとをかしげなりけるを見をりて、

うら若み寝よげに見ゆる若草をひとの結ばむことをしぞ思ふ

の傍線部を取り込んだものである。

(10)の歌は、「勢語」（第二十三段）の筒井つの章段にみえる、立田山を越え行く男の身を案じて詠じた、

風吹けば沖つ白浪たつた山　夜半にや君がひとりこゆらん

の歌を前提にしている。教長歌は、女性の立場から見た立田山越えではなく、詠歌主体の立場に転じ、しかも「白浪」には盗賊の意も込めているとみなしてよい。

(11)の歌は、川を隔てていても、年に一度は逢える七夕と対比、我が身は河に隔てられて逢えない苦しい恋のため、涙で袖を濡らすさまを詠じている。「勢語」（第八十二段）には、交野の天の河で、七夕にかかわる歌もみえるが、この歌は、それをも含み込み、「勢語」（第百七段）の、

つれゞのながめにまさる涙河袖のみひぢて逢ふよしもなし

の歌の表現も取り込んでいる。

以上、「貧道集」を中心に、教長の出家以前の詠歌として確証のあるもの、あるいは出家以前かと臆測されるものから、十余首ほどの「勢語」享受歌を指摘し、検討を加えてみた。

その「勢語」の享受の傾向として、例えば「かのこまだら」(1)、「おもへども身をしわけねば」(4)、「かきくらすこころのやみ」(6)、「たかきいやしき」(7)、「ねよげにみゆる」(9)、のように、「勢語」の和歌表現を単純に取り込んでいることが窺える。恋の歌を雑や離別に転ずるなど、若干の工夫の施された歌もあるが、それも鮮やかな転換、昇華をとげていない。

その大部分が歌題詠であることにもよろうが、要するに「伊勢物語」の主人公である男の起伏の多い人生、そこから横溢した歌と教長自身とが真摯に対峙しての享受はなされていない。換言すれば、それは、「勢語」を内面化した深遠な享受に到達していないということでもある。

四

先にも詳述したように、崇徳院の近臣として、政界でも歌界でも活発な行動を展開していた教長は、四十八歳の時に勃発した保元の乱によって、その人生が突如、暗転する。その際、出家して法名観蓮となったが、捕えられて常陸に配流された。

「伊勢物語」の主人公の昔男が「身をえうなき物に思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり」（第九段）と東下りを敢行したのは、東国に新天地を求めての意志的な行為であったが、教長自身も配流という受身的な行為ながら、近似の体験をせざるを得なくなったのである。

常陸の国の「信太の浮島」での足かけ六年にわたる長い辛苦の謫居生活は、教長に人の世の種々な悲哀や宿命を痛感させたであろうことは容易に想像される。

やがて赦免・召還されて帰洛したが、東山・北山の辺の山寺に隠棲、高野山に入ったりして、仏道修行、隠遁的な生活を送りながら、京洛の歌仲間との交誼も重ねた。

出家前に対峙していた「伊勢物語」は、これらの体験を経た後、どのような

相貌をもって教長に享受されたのであろうか。

清輔家歌合に

(1) あかなくによなよなつきをみつるかなさらずはおいやつもらざるべき

（四〇七）

清輔家の歌合は永暦元年（一一六〇）に行われているが、この時教長は配流中なので、(1)の歌は長寛年間（一一六三～六四）の方と考えられている。[15] 召還されてまもない頃の詠歌であるが、次の「勢語」（第八十八段）の、

昔、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちどもあつまりて、月を見て、それがなかに一人、

おほかたは月をもめでじこれぞこの積れば人の老いとなる物

の歌と場面を念頭にする（因みに、この歌は『古今集』（雑上・業平朝臣）に入集）。本歌が大概のことで月を賞美するのは止めよう、「月」が積もれば老齢となるからと詠ずるのに対し、教長歌は、月を眺望しなかったら老齢にならないという定めはないのだから、それとかかわりなく飽くことなく毎夜美しい月を眺めたとする。「勢語」の「月」の言葉の洒落を排し、歳月とともに老いは確実に加わるとの諦観のもと、あくまで澄明な月を眺める姿勢を示している。

次に、俊成卿十首歌から二首を取りあげてみる。

（俊成卿の十首歌のうちの郭公の歌）

(2) まちかねてまどろむほどのほととぎすゆめかうつつかききもさだめず

（二二六）

(3) ほととぎすあかぬこころやおしなべてたかきいやしきひとしかるらん

（二三四）

俊成十首会は、嘉応二年（一一七〇）以降、承安二年（一一七二）までの間に詠出されたものかとされる。[16] その時の歌は「貧道集」では「俊成卿の十首会……」の詞書などで幾首か収録されているが、(2)(3)の歌が、俊成十首会のものとの確証はない。「俊成卿の十首歌のうちの郭公の歌」の詞書のもとに十三首の郭公が一括掲載されており、詞書が全歌にかかるとは限らないからである。従って、(2)(3)が教長の出家後の詠歌かどうか判然としないが、「勢語」の享受がなされているので、便宜上、ここで対象とする。

(2)は、郭公の声を待ち疲れて、うとうとしている間に聞いたので、夢の中か現実で耳にしたのか判然としない意。これは周知の、斎宮章段の、

君やこし我や行きけむおもほえず夢か現かねてかさめてか

（第六十九段）

の歌の傍線部を取り込み、恋歌を夏歌に転じたもの。

(3)の歌も、前節の(5)(7)で享受のあった「勢語」（第九十三段）の、

あふなく思ひはすべしなぞへなく高き卑しき苦しかりけり

の傍線部を摂取、恋歌を夏歌に転じている。(2)(3)とも、「勢語」享受の様相は、出家前のそれと近似する。その点では、これらの歌は出家前の詠歌とみなすのが妥当かもしれない。

さて「貧道集」には、常陸へ配流されて京を離れるときの

とほきくにへつかはされける時、ひとの許へ云遣はせる

おちたぎつみづのあわとはながるれどうきにきえせぬ身をいかにせん

（八二四）

とか（この歌は「続詞花集」入集）、阿闍梨覚恵との贈答歌（八〇五～八〇八）などが収められているが、常陸の国への道中詠は、わずかに三首（八二五～八二七）、また常陸から京洛の人に遣わした贈答歌が一組（八〇九・八一〇）存在するにすぎない。

配流される身とはいいながら、東国へ下る教長の眼に、「勢語」の東下りの章段が痛切な響きをもって体感されたであろうが、残念ながら、その道々の心情を吐露した歌は数首しか現存しない。

けれども隅田河まで辿り着いたときの、次の長い詞書と歌とは、その道中の感慨を補ってくれるものがある。

ことにあたりてあづまのかたにまかりけるに、[1]おほいなるかはのほとりにゆきて[2]ひもくれがたに、[3]わたしもりはやわたらなむといそがせば、[4]いともものがなしくてふねにのらんとするに、[5]このかはをばなにとかなづくるととふに、これなむすみだがはといふは、むかし在中将のいざことはむみやこどりとよみけむを思ひいでられて、きしかたゆくすゑものあはれなることかぎりなくてよめる

(4) すみだがはいまもながれはありながらまたみやこどりあとだにもなし

（八二五）

この隅田河での渡守との問答は、「勢語」（第九段）の著名な東下りのシチュエーションと重ねているが、表現が細部にわたって援用されているので、比較のために、敢えて隅田河の場面を引用しておく。

猶行き〳〵て、武蔵の国と下つ総の国との中に、(1)いと大きなる河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれるて思ひやれば、限りなくとほくも来にけるかなとわびあへるに、(3)渡守、「はや舟に乗れ、(2)日も暮れぬ」といふに、(4)乗りて渡らんとするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大きさなる、水のうへに遊びつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。(5)渡守に問ひければ、「これなん宮こどり」といふをきゝて

名にし負はばいざ事とはむ宮こ鳥わが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。

いま念のため、「貧道集」の「勢語」からの摂取状況を明確にするため、傍線に番号を付して対応関係を示しておいた。

みられるように家集の詞書は、「勢語」の傍線部を点綴して記されていることが明瞭だが、一番大きな相違は、渡守に尋ねた対象である。即ち「勢語」で質問したのは「京には見えぬ鳥」の名であったのに対し、教長の方は「おほいなる」河の名である。彼は、今渡らんとする大河が隅田河であることを渡守から知らされ、「勢語」東下りの都鳥の場面を想起、今も昔と変ることなく河は流れているのに、そこに在中将が見た「都鳥」の姿はないと嘆息して詠歌する。大河の名を渡守から聞き出すまで、教長は本当に知らなかったのかどうか、そのあたりは事実そのままではなく、多少の虚構も施されていることは念頭におくべきだろうが、教長が「勢語」の昔男のそれを追体験しようと志向していることが肝腎である。そして、

すみだがはいまもながれはありながらまたみやこどりあとだにもなし

と詠ずるとき、作者は、物語世界に存在した「都鳥」の不在、それゆえに物語世界に重なることのできない昔と今の時間の落差、及び、もはや眼前には都のことを尋ねる物さえもいないといった、種々な喪失感を痛感したにちがいない。そして、「きしかたゆくすゑものあはれなることかぎりなく」と寂寥と将来への不安な心情を掻き立てられている。

ところで、隅田河での教長の詠歌で不審なのは、「またみやこどりあとだにもなし」の「また」の意である。詞書や歌本文の範囲でみると、そこに「また」を誘発する要因は見出せないのではないか。これは、配流に際して京を出発するとき、「勢語」の東下りを念頭に、八橋や「かきつばた」などとの出合いを期待しながら下りつつ、その対象が跡かたもなくなっていたという喪失体験が前提にあって誘発された「また」であったのではなかろうか。この推測が妥当とすれば、和歌が現存しないために不透明な部分の多い教長の常陸への旅が「勢語」を念頭に続けられてきたといった心情の一端も推し量ることもできよう。

この他に、出家後の「勢語」享受を示す歌を列挙してみる。

念仏時よめる

(5) としつもりほけにこころはかたぶけつ我がおもふことうるはしみせよ

（八四一）

（東山辺にて無常歌とてよめる）

(6) つひに行く道とはよそにききしかどわれにてしりぬきのふけふとは

（九三二）

(5)の歌は「勢語」（第二十四段）で、三年待ちわびて、新しい男と契ることになった女の詠じた歌に対して、もとの男が返した歌、

梓弓ま弓槻弓年をへてわがせしがごとうるはしみせよ

の下句の「せしが」を「おもふ」に変えただけで、他はすべて取り込んだもの。「勢語」は夫婦の愛憐にかかわる歌だが、それを教長は、長年にわたり念仏に精魂をかたむけてきた、その思いのごとく「うるはしみせよ」と仏に祈願することに変奏している（因みに『新編国歌大観』は、「我がおもふこと」とするが、本歌との関係や内容から判断して「我がおもふごと」とする方が妥当ではなかろうか。）

(6)の歌は、「勢語」の最終章段にある、

むかし、をとこ、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、

つひにゆく道とはかねてきゝしかどきのふ今日とは思はざりしを

（第百二十五段）

の男の臨終の歌句の大半を摂取、死のことを、これまでよそごととして聞いてきたが、それが「きのふけふと」にさし迫ったものであることを自ら体験したと詠む。その点、詠歌の契機も内容も「勢語」と全く一致する。出家後の教長が「勢語」のこの死に直面した詠歌に着目していることこそ看過できない事象である。

また、

無常不嫌人

(7) かずならぬうきみなれども世中のさらぬわかれをいかがのがれん

（九三五）

物へまかりけるに、船岡のほとりをすぐるに、たかきいやしきつかども
のひまなきをみて

(8) みな人のはてはよもぎふこけのしたさかえしやどはいづくなるらん
（九四二）

なども、「勢語」享受を前提とする。

(7)は、長岡に住む母が息子である男に詠んでよこした歌、

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな

に対して男が返した、

世の中にさらぬ別れのなくも哉千世もといのる人の子のため
（第八十四段）、

の歌句を摂取し、しかも死は貴賤にかかわりなく襲ってきて逃れることはできない宿命だと詠ずる。

(8)の詞書の傍線部の「たかきいやしき」は、これまでにも二首ほど摂取関係を指摘した「あふな〳〵思ひはすべしなぞへなく高く卑しき苦しかりけり」（勢語・第九十三段）と、身分不相応な恋をする苦しみの歌の歌句を取り込み、船岡の墓場を見ながら、身分の高い人も賤しい人も最後は皆、苔の下の人となると詠む。

この二首も出家後の詠歌と推測されるが、いずれも逃れることのできない死を凝視する姿勢のなかで「勢語」を享受している。

最後に「貧道集」の成立ともかかわる微妙な問題を取りあげてみたい。

家集には、次のような「勢語」の昔男を意識した詞書を有する歌が二首ある。

京やすみうかりけん、ゐなかなるやまでらへまかるみちに、しづのかきねなるむめのかうばしかりければよめる

(9) いなしきもかきねのむめのかをるかははなのみやこにかはらざりけり
（七七）

京やすみうかりけむ、ゐなかなる山でらにまかりて、みやこを思ひいでて人の許につかはしける

(10) すみなれしおもひのいへをあくがれてさらぬわかれのかどでをぞする
かへし　頼政朝臣（九五六）

我もさぞ思ふおもひのいへゐにはいままでいでぬこころをさなご
（九五七）

この(9)(10)の歌の詞書の「京やすみうかりけん」は「勢語」（第八段）の「むかし、をとこ有りけり。京や住み憂かりけん、あづまの方に行きて住み所もとむとて、ともとする人ひとりふたりして行きけり」の傍線部をそのまま引用したものである。しかも(9)の歌は、京洛を住み憂く思って、田舎の山寺へ行く途中で見た賤の家の垣根に咲く梅香を都のそれと対比、(10)の歌も、田舎の山寺で都を想起、頼政朝臣と贈答している。このシチュエーションは、「勢語」の主人公が東国へ下りながら、嗔目する景につけて都を想起するのと重なる。ただ「勢語」の主人公は都への未練を色濃く残すのに対し、教長は、田舎にも都と変らぬ梅香を見出したり、都への決別を表明している点に若干の心情の差違も窺える。

因みに(10)の歌の「さらぬわかれ」は、「勢語」（第八十四段）の語句を取り込み、また詞書を含め、「詞花集」に入集の源俊頼の、

みやこにすみわびてあふみにたなかみといふところにまかりてよめる
あしびたくまやのすみかはよのなかをあくがれいづるかどでなりけり
（雑下・三四八）

の歌の影響をも受けている。

このように、教長歌と詞書が「勢語」を念頭にして詠作されていることは確かだが、気になるのは、詞書の「京やすみうかりけん」と、自身を第三者として客体化していることである。

この詞書は作者自身が、敢えて自身を「勢語」享受との関連で客体化したのか、あるいは作者以外の第三者が記したのか、一応、検討してみる必要がある。

このような問題を改めて提起するのは、「貧道集」に後人の注記の混入があるとされているからである。

即ち「後人の注記が左注として本文化したと推定される箇所一例がある」[17]とか「現存本には後人の注記の混入がみられる（九四五左注）」[18]とされるのは、次の歌の後の波線部分である。

やまひおもくて、さすがにいきばかりはかよひてひさしくなりにけるをり、もといひなれたることなれば、かくなんよめりける

(11) いきもせずしにもやられぬものゆゑになにときえやらぬつゆのいのちぞ
かくてみまかりにけりとぞ
（九四五）

危篤状態に陥っても、なかなか消えない自身の「露の命」への焦燥感を吐露した歌の後に、「かくてみまかりにけりとぞ」と記すことは、自撰家集では常識的にみてありえないことで、後人の左注の混入との見方がなされるのももっと

もである。

ただし、果してこれを後人の注記の混入と最初から決め込んでしまってよいものか、また、後人の手になるとすれば、それは「かくてみまかりにけりとぞ」だけにとどまるものなのか、その辺の検討を要するように思われる。

作者教長の死を伝える一文は、先に引用した(9)(10)の「京やすみうかりけん」と作者を客体化した人物と同一の筆者の手になるもので、後人の注の混入というより、元来、本文として存在していたとの推測も不可能ではない。

「貧道集」は全体として歌題詠が多く、また詠歌事情を述べたものも、ごく簡単に記されている。そういった傾向のなかで、常陸に配流された前後の八〇九番～八二七番とか、帰洛してからの九三六番～九六四番には、長い詞書を有する歌や贈答歌が集中している。雑部の歌という性格にもよるだろうが、いささか異常な感じも受ける。

いま、「京やすみうかりけん」「かくてみまかりにけりとぞ」などが、後人の手になると考えれば、東国に配流された教長を、まるで「勢語」の昔男と重ね、その詠歌にかなり詳細な詞書を付し、すでに自撰されていた「貧道集」に追補したケースも想定してよかろう。

けれども、これまでの「勢語」享受の姿勢からみて、自身を「京やすみうかりけん」と歌物語の主人公に擬したのは、やはり教長で、長い詞書も彼の手になるものと考える方が穏当ではなかろうか。「かくてみまかりにけりとぞ」の歌の詞書中の「もといひなれたることなれば」とは、それより数首まえの、

年おいぬれどいままでまかりかくれぬをなげきてよめる
つゆのみのいままでいかにきえざらんあけぬくれぬとおきぬふしぬと
（九四〇）

このよにはまつことつゆもなきものをなににかかれるたまのをならむ
（九四一）

などにみられる常日頃の言動をさしており、作者自身の手による詞書として緊密に結び合っており、他人の手になるものとは考えられない。

これらを勘案すると、自身を昔男に擬した長い詞書を有する歌群も、やはり教長自身が生前に纏めていたものとみなしてよいのではなかろうか。自身を第三者にして記述した家集は「一条摂政御集」などをはじめ、珍しいことではない。

さらに「かくてみまかりにけりとぞ」も、最初から他人の注記の混入と決めてかかるのではなく、重病になった教長が、この先長くないのを覚悟、息のあるうちに記しとどめていたという奇抜なケースも念頭にしておく必要もあろう。

ここで再度、問題にしている歌と詞書を引用してみよう。

やまひおもくて、さすがにいきばかりはかよひてひさしくなりにけるをり、もといひなれたることなれば、かくなんよめりける

(11) いきもせずしにもやられぬものゆゑになにときえやらぬつゆのいのちぞ
かくてみまかりにけりとぞ
（九四五）

これは表現こそ重ならないが、「勢語」（第百二十五段）の、

むかし、をとこ、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、
つひにゆく道とはかねてきゝしかどきのふ今日とは思はざりしを

の場面を想起させるし、教長自身も念頭にしていた可能性がある。

さらには「大和物語」[19]（第百四十四段）の、在原業平の子息在次君の、

かくて人の国ありきくて、甲斐の国にいたりて住みけるほどに、病して死ぬとてよみたりける
かりそめのゆきかひぢとぞ思ひしを、今は限りの門出なりけり
とよみてなむ死にける

の場面とも重なる（因みに、和歌の下句は、(10)の下句の「さらぬわかれのかどでをぞする」と類似する。）

即ち、東国常陸の国へ配流された体験を有する教長は、「勢語」の昔男の人生と重ね、自身をまるで歌物語の主人公のように客体化し、臨終近くなったことを自覚した歌を詠じ、その後に、己れの死を後人の伝承のごとく「かくてみまかりにけりとぞ」と記し、「勢語」の主人公のような人生を自ら完結させておいたのではないか。そんな奇抜なケースも、一方では臆測してみたいのである。

俊成は「正治二年俊成卿和字奏状」[20]で「教長も清輔も源氏を見候はず」と批判している。確かに「貧道集」を読んでみても、教長が「源氏物語」に通暁、その世界を和歌に摂取した痕跡はあまり窺えない。

しかし、「伊勢物語」の方は愛読し、本論考でも指摘したように、「勢語」の世界を背景にしたものや物語中の歌句を享受したものが相当数認められた。これは当代の歌人の大方の傾向で、教長特有のものではないであろう。

けれども教長の場合には、常陸配流という「勢語」の主人公と類似した切実

な体験を有していたため、配流以前と以後との間の享受の様相に差違のあることが留意されるのである。

出家以前の教長の「勢語」享受は、すでに詳述したように、「かのこまだら」「ねよげにみゆる」といった歌句を自歌に単純に取り込み、恋歌を雑歌や四季歌に転ずるなど、若干の工夫は施しているものの、鮮やかな転換・昇華を遂げてはいない。また、対象とした「勢語」の章段も恋愛を中心としたものが大半を占めていた。

これに対し、常陸に配流されて東下りを体験、配流地での辛苦の謫居生活を経て京へ召還されて以降の「勢語」享受は、その様相を異にする。

特に先引した隅田河での場面は印象的で、「勢語」の場面を想起し、深い喪失感を吐露し、慨嘆してもいる。さらには「京やすみうかりけん」の詞書などでも窺見されるように、自身の人生を歌物語の主人公と重ねながら歌稿を纏めていた気配もあり、極めて興味深いものがある。

その摂取方法は「勢語」の歌句をそのまま引用するなど、出家以前とさしたる変化をみせてはいないが、その着目した章段が、例えば、「さらぬ別れ」を核とした母と子息の贈答歌の場面とか、主人公の臨終の場面など、人間の死別を対象した章段を無常思想と絡めて享受している。

換言すれば、保元の乱以降、「伊勢物語」は、藤原教長に、人と人との別離や死を凝視させるという、新たな相貌をもって享受されたといえよう。

〔注〕

(1) 「国語と国文学」（昭和五十年二月）。
(2) 「岡山大学教育学部研究集録」（第九十五号、平成六年三月）。
(3) 『鎌倉時代の思想と文化』所収。
(4) 「国語と国文学」（昭和二十八年十二月）。
(5) 「立教大学日本文学」（第五十六号、昭和六十一年七月）。
(6) 『増補 史料大成 兵範記二』に依る。
(7) 「貧道集」の歌本文と歌番号は、『新編国歌大観 第三巻』に依拠。以下、和歌の引用、歌番号はすべて『新編国歌大観』に依る。
(8) 「教長古今注」には、浅田徹氏「教長古今集注と始発期古今伝授の問題」（和歌文学研究、第七十七号、平成十年十二月）などの論考がある。
(9) 注（3）所収論文。
(10) 『私家集大成 中古Ⅱ』の「前参議教長卿集」解題。
(11) 松野陽一著『藤原俊成の研究』参照。
(12) 「伊勢物語」は、日本古典文学大系本に依拠。ただし、歴史的仮名遣いの方を採用して引用。
(13) 「後葉和歌集」（恋一・三〇〇）にも入集。
(14) 注（11）に同じ。
(15) 注（5）の高崎由理氏論文。
(16) 注（11）に同じ。
(17) 『日本古典文学大辞典』の「前参議教長卿集」解題（黒川昌享氏執筆）。
(18) 注（10）に同じ。
(19) 「大和物語」は、日本古典文学大系本に依拠。
(20) 『歌論集一』（中世の文学）に依る。